

ただいま調査中！ 1万年前の“植物利用”

発掘調査した竪穴住居跡の床などの土をフルイにかけて洗ったところ、調理などで焼け焦げたとみられる植物の種子・果実(炭化種実)が沢山みつかった。さらに、土器をよく観察すると、作られる途中で粘土に入り込んだ植物の種子・果実のあと(圧痕)が残っていた。

植物だけではなく、コクゾウムシという害虫の圧痕もあり、この発見で、約1万年前の人々が食料を貯蔵していたこともわかった。

当時の植物利用を詳しく調べていくことで、約1万年前にどんな植物を利用していたのか、食べ物や味付け、当時の植生(植物が生えていた環境)などもわかるのではと期待が広がる。



フルイがけ・水洗した土から
微細な種子や果実を取り分ける



目次

取掛西貝塚だけじゃない！
“市内最古”的バイオリン形土偶



縄文時代早期で、取掛西貝塚よりも古い
土偶(約1万年前)が、市内の小室上台遺
跡で出土している。手乗りサイズのシンプルな
見た目だがとても丁寧なつくりで、さまざま
な祈りが込められただろう。

↑
2cm
↓

実物大

編集・発行：船橋市教育委員会生涯学習部文化課
令和5(2023)年6月19日発行(第2版)
千葉県船橋市湊町2-10-25
電話：047-436-2887
QRコード
取掛西貝塚について
特設ホームページで情報発信中です！ 特設HP

- 8 -

千葉県

船橋市

国史跡

取掛西貝塚

1万年前の貝塚からみえる暮らしと環境

Torikake Nishi Kaizuka



くに し せき 国史跡 取掛西貝塚とは…

取掛西貝塚は、千葉県船橋市の飯山満町と米ヶ崎町に所在する遺跡だ。標高約25mの台地上で東西500mに広がり、約76,000m²(東京ドームの約1.6倍)の面積をもつ。

これまでの調査で、全国的にみても歴史・文化を知るうえで重要な遺跡であることがわかったことから、取掛西貝塚を将来にわたって保存するため、令和3(2021)年に国史跡に指定された。

このパンフレットでは、取掛西貝塚を知るうえで、主なポイントを紹介していきたい。



国史跡
取掛西貝塚



赤い▼は、取掛西貝塚で見つかった竪穴住居跡や土器などの主な時期を示している



上空からみた取掛西貝塚（東側から撮影）



約1万年前の竪穴住居跡
(白線は住居の壁があった跡)

約1万年前の “関東最大級”のムラ があった

取掛西貝塚では、これまで8回の調査が行われ、年表の▼がある時代のムラの跡などが発見されている。

なかでも、縄文時代早期前葉(約1万年前)は、竪穴住居跡が50軒以上も発見されており、そのうち6軒は、食べたあと貝殻などを捨てた場所=貝塚としても利用されていた。

これまで調査されたのは遺跡全体の一部で、今後、竪穴住居跡がさらに多くみつかる可能性もある。約1万年前の貝塚をともなうムラはとても珍しく、そのなかでも関東地方では最大級の規模のムラといえるだろう。

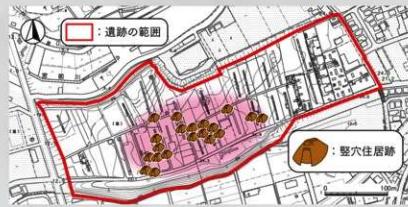
定住生活のはじまり？ 取掛西ムラの移り変わり…

旧石器時代、日本列島にいた人々は動物の群れを追いかけて、狩りをしながら「移動する」生活をしていたと考えられている。では、その後の生活は…?

縄文時代早期(約1万年前)、取掛西貝塚の住居の広がり方をみると、最初は台地の西の方に集まっていたのが、その後は東の方に集中している。住む場所は少しづつ変っているが、ムラの近くで計画的に食べ物をとりながら、この台地上で「定住生活」を営んでいたのかもしれない。

考古学では、遺跡でみつかった土器の文様や形の違いによって、時期の違いを見分けている。取掛西貝塚の土器をみると、竪穴住居はすべて同時にあったわけではなく、いくつかの時期に分けられることがわかる。

古い



約1万年前(なかでも古い時期)の土器(稻荷原式・花輪台式など)と竪穴住居跡の位置

縄文時代早期



約1万年前(なかでも新しい時期)の土器(東山式・平坂式など)と竪穴住居跡の位置

縄文時代前期
新しい



約6千年前の土器(ニイ木式・関山式・黒浜式など)と竪穴住居跡の位置

取掛西貝塚のココがすごい！①

貝塚の下からみつかった…

謎の“動物骨集中”!!

動物の肉は縄文時代の主な食べ物のひとつだ。食べあとは残った骨は、道具の材料として再利用されるか、捨てられて貝塚の中からみつかるのが普通だ。しかし、取掛西貝塚で集められた骨の様子は、単に捨てられるのとは違ったところがある。

取掛西貝塚では、使われなくなった竪穴住居の中で、積み重なった貝殻（貝塚）の下から、動物の骨を集めて並べ、火を焚いた跡がみつかった。

その様子から、たとえ狩りで仕留めた動物の魂を送ったり、狩りを続けられるよう動物の再生を願ったりするなど、何らかの儀礼をおこなった跡という意見もある。そうした儀礼の跡だとすれば、日本最古のものとなる。

貝塚が守った！縄文時代の動物骨



約1万年も前の動物の骨がなぜ今まで残ったのか、その流れを見ていこう。

① 最初は竪穴住居があり、人が住む場所として利用されていた。



② その後、竪穴住居が使わなくななり、その跡地が少し埋まってできくぼみに、動物の骨が集められ、一部では火が焚かれた。



③ さらにその後、くぼみに貝殻が捨てられて貝塚ができた。貝殻のカルシウムで守られて、骨が腐らずに残った。

イノシシの頭蓋骨

シカの角

集められた動物の骨などは、細かい骨をのぞくと、右の図のような並び方だったようだ。

イノシシの頭蓋骨は7体分あり、火で焼かれているものもある。

イノシシは、大人（成獣）が4体のほか、子ども（幼獣）1体、その中間の若者（亜成獣・若獣）2体で、年齢はさまざまだ。

シカの角は、火が当たるところに立てられていたようだ。

このほかに、焼けたシカの頭蓋骨などもいくつかみついている。

イノシシの頭蓋骨4つが並んでいる

イノシシの頭蓋骨

イノシシの頭蓋骨

イノシシの頭蓋骨

動物の骨や角の主な配置



イノシシの頭蓋骨（上から見た状態）

イノシシの頭蓋骨（裏返した状態）

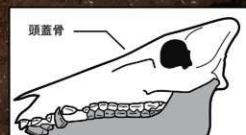
シカの角

火で焼かれた範囲

動物骨集中（両側からみた様子）



動物骨集中から出土した骨など



イノシシの頭の骨イメージ図

取掛西貝塚の動物骨集中は、頭蓋骨が多いことが特徴のようだ。イノシシの頭蓋骨は、下アゴを外した状態で並んでいた。

このほか、イノシシやシカなどの下アゴや脚、胴体など他の部分の骨もみつかっているが、頭蓋骨の数に比べると少ない。

頭蓋骨のなかには、骨の一部が黒焦げになるまで焼かれてるものもある。骨の状態で直接焼かれたものもある。その点でも儀礼の可能性があり、まだまだ調べる余地がありそうだ。今後の研究の進展が期待される。

取掛西貝塚のココがすごい! ②

1万年前の貝塚は“宝の山”!



貝塚の断面を横からみた様子(上)と、その拡大写真(下)



針(動物の骨製)



ビーズ(ツノガイ製)↑→
ツノガイ標本(参考)



装飾品(サメの歯・タカラガイ製)



刀(ハマグリ製)

※イラストは想像図

貝塚からは、貝殻や動物・魚の骨(食べ物)と土器や石器(生活の道具)のほかに、動物の骨や貝殻でつくられた道具やアクセサリーなどもみつかっている。

針は毛皮などを縫うためのものと考えられ、現代と同じ形をしている。貝殻のふちに刃をつけた道具(貝刃)は、魚のウロコなどを取るのに使ったと考えられる。アクセサリー(装飾品)は、サメの歯や貝殻に穴を開けたり削りしたもので、糸を通してビーズのように身に着けたようだ。

なかでも、ツノガイという貝で作られたビーズは素材を含めると2,000点を超えて、日本国内では最多の量を誇る。これほど大量のアクセサリーが集中する様子をみると、貝塚のもつ役割は、単なるゴミ捨て場にとどまらないのかもしれない。

貝の種類からみえてきた… 縄文時代の環境の移り変わり



縄文時代早期前葉(約1万年前)の貝塚(↑)と出土した貝(→)



約1万年前と約6千年前は、どちらも海岸線の位置が現在とはかなり異なっていたようだ。約1万年前には海面が今よりも約40m低く、取掛西貝塚から海が遠かったとみられる。

しかしその後、急激な温暖化により海面が上昇し(これを「縄文海進」と呼んでいる)、約6千年前には現在よりも2~3m高くなり、取掛西貝塚の近くまで海がさかいたようだ。

約1万年前は、縄文時代としては貝塚がつくられた頃にあたる。貝塚に捨てられた貝殻は、当時の環境を知る重要な手がかりだが、当時の貝塚は全国的にみてもとても少ない。取掛西貝塚は、その数少ない重要な遺跡のひとつだ。

取掛西貝塚でみつかった貝の種類の違いからは、海面が現在よりも低かった頃、海面が現在よりも高くなっていた頃、それぞれの環境の違いをうかがうことができる。